
追 悼 庄垣内正弘先生
Obituary MASAHIRO SHOGAITO

庄垣内正弘さんと日本言語学会

柴谷方良

今年の春、庄垣内正弘さん逝去の知らせを驚きとともに受け取った。私より二歳ばかりしか年上でなく、また昨年来のご病気の経緯を知らなかったものだから、突然の訃報であった。

庄垣内さんと私とはとくに昵懇というほどの仲ではなかったが、言語学会の仕事を通して知り合い、また1997年度-1999年度、2003年度-2005年度と近い間隔で会長を務めた関係上、いろいろお助けいただいたこともあり、現在の元会長・顧問のなかでは私が庄垣内さんのお人柄、お仕事について最もよく承知していると思われる。このような理由から、言語学会における庄垣内さんのご活躍を文章に綴ることによって、氏を偲ぶこととなった。

私が庄垣内さんの存在を初めて知ったのは、1980年代の言語学会の委員会の席上であった。1983年に井上和子先生が会長になられてから、学会の風潮がずいぶん変わったが、それ以前の委員会は、発言も憚られる堅苦しい雰囲気の中かで執り行われていた。当時の委員会ではたぶん庄垣内さんと私がもっとも年少であったと思うが、そんな雰囲気の中かでも、庄垣内さんはまったく忌憚のない意見を堂々と述べ、会長ばかりか他の役員たちも慌てさせていた。アメリカから帰って数年しか経っていなかった私は、言語学会にも見上げた人がいるものだ、感心した。

このような庄垣内さんの委員会における「活躍」は以降も続き、それにつれて若手の委員も発言し易くなった。私などは、庄垣内さんの一言を楽しみに委員会に出席していたようなものであるが、どういうわけか、氏が1994年に京都大学に移られてからは、ずいぶんおとなしくなられ、委員会での率直なご意見もあまり聞かれなくなってしまった。

京大に帰られてから、集中講義などにお招きいただいたり、また時には学会のあり方や将来について、京都や神戸で話し合ったりする機会があった。今でこそ日本言語学会は、学会活動・財政基盤ともに盤石の様相を呈しているが、当時は会員数も少なく、財政的な危機に悩まされていた。

昨今の学会の活況からは推しはかれないことだが、私が編集委員を初めて務めた1980年代後半あたりまでは、研究発表や投稿原稿の数も少なく、『言語研究』の紙面を埋めるのに苦労して、原稿依頼をしなければならないような状況もあった。私

が編集委員長に選出された1990年あたりには、学会誌への投稿数はかなりの数に達していたが、学会は財政面その他で窮地にあった。当時学会の事務局は三省堂出版部に間借りしていて、事務の仕事から『言語研究』出版事業全般にわたって、三省堂のお世話になっていた。ところが、三省堂の担当者が退職されることとなり、それを潮にお世話になっていた、原稿の割り付けや校正などの編集作業全般の見直し、それに学会事務局そのものの移転をも余儀なくされた。

当時の会長であられた松本克己先生から、これは大変なことになったと相談を持ち掛けられたが、私とて妙案があるわけではなく、二人してほとんど困り果てた。この一大窮地から学会を救ってくれたのが、庄垣内さんであった。

庄垣内さんが以前からご自身の研究成果の出版を通してご存じであった、京都の中西印刷株式会社を紹介してくれたのである。そこで、さっそく松本会長と私が、「松香堂書店」も併せ持つ、江戸時代からの老舗を京都上京区に訪ねて行き、学会の窮状を説明して、『言語研究』の出版業務と学会事務を限られた予算内で委託できないか申し入れたのである。中西印刷は、その頃すでにいくつかの学会の機関誌の出版と事務局を引き受けていて、日本言語学会の仕事もそれらと同じくお引き受けしましょうと、六代目か七代目の社長から快い返事をもらうことができ、松本会長ともどもほっと胸をなでおろして京都駅に向かったことを鮮明に覚えている。

中西印刷に学会事務をお願いしてからは、学会運営もずいぶん楽になり、また会員の数も増え、財政基盤も整ってきた。私が会長を引き受けた1997年あたりには、いろいろな新しい事業の立案や、それらのための積立金も計上できるまでに状況が改善されていた。現代行われている夏期講座や、危機言語についての研究支援や啓発活動などであるが、これらの事業を継続し、軌道に乗せてくださったのも、私の次に会長になられた庄垣内さんである。

このように、日本言語学会の近年の安定した運営ならびに学会の活況は、庄垣内正弘さんのご尽力に負うところが大きい。会長を退かれたあとも学会の繁栄を常に気にかけておられたようであるが、これからの一層の発展を見ずに我々のもとを去られた。日本学士院賞に輝く業績ばかりか、言語学会の歴史にも大きな足跡を残され、ご本人は満足であったかも知れないが、我々にとっては、またとない同僚・先輩を心の準備もなく失うこととなり、まことにもって無念である。唯々、ご本人のご冥福を祈るばかりである。

(日本言語学会顧問／ライス大学教授)

庄垣内正弘先生の文献言語学

吉田 豊

生前、差し上げる手紙やメールで「先生」と書くと酷く怒られ、かならず庄垣内さんと呼ぶように言われたものであったが、ここではやはり庄垣内先生と呼ぶことにしたい。これも生前、例によって冗談まじりで、死んだら法名は「少年院」にするとおられたが、実際には「豊言院」を名乗っておられると聞く。とにもかくにも言語とは深い因縁があった方であった。

先生は1942年4月17日、広島県呉市で生まれられた。1968年に大阪外国語大学モンゴル学科を卒業、同年4月、京都大学大学院（言語学専攻）に進学、博士課程を経て1974年に京都大学の助手に採用された。1980年には神戸市外国語大学に助教授として赴任、1984年に教授に昇進された。その後1996年に京都大学文学研究科に戻られ、2006年に定年で退職し、京都産業大学に奉職されたが、2012年3月病気を理由に退職された。そして2014年3月23日未明、空腸癌で逝去された。享年71。72歳の誕生日の20日ほど前だった。

先生は私が知る限り一貫してご自分を「(独特のアクセントで) リンギスト」と呼び、何時の頃からは「文献言語学」が専門であるとも言っておられた。その文献言語学について先生は、東方学会が企画した恩師の西田龍雄先生との座談会（『東方学』No.119,2010）で、「…（西田先生）独自の方法論の確立というのがあります。後に私たち弟子筋が呼ぶ呼び方ですが、「文献言語学」というのがあります。文献を言語学的手法によって読み解き、さらにその内容を言語学的に分析する方法です」と言っておられる。座談会に臨席した私の記憶では、西田先生は「文献言語学というのは庄垣内君が作った言葉で、それを皆さんが打ち立てていくというのは期待しています」とやや素っ気なく答えておられた。その西田先生自身は、庄垣内先生や私が受講していた特殊講義（当時の京大では「研究」と呼んでいた）のなかで、華夷訳語のような漢字で音写した言語の資料は、上手に分析すれば現代のフィールド言語学者が収集したデータと同様に有益だというようなことを言っておられた。庄垣内先生は文献言語学の着想を西田先生の研究に見だし、ご自分の研究スタイルとして確立されたのだと思う。先生と西田先生とは、師弟であると同時に激しいライバル関係にもあり、お互いの研究については悪口も言っておられた。この人間関係の機微は、先生が書かれた西田先生の追悼文（『言語研究』143,2013,『東方学』125,2013）によく現れていると思う。

庄垣内先生の文献言語学は、上に引用したご自身の定義で明らかなようだが、その実非常に重要な側面が強調されていないと思う。それは、それまで誰も読めなかった文献を解読して、発音と意味を回収できる言語データにするという側面である。「解読」というやや大げさで派手な言葉を使うのを嫌われた、先生一流の謙虚さで

あったのかもしれない。いずれにせよ、この側面を強調しなければ、古い文献を資料として分析する従来の歴史言語学と選ぶ所がない。そして先生の「言語学的に分析する」手法は必ず構造言語学のそれであった。すなわち構造（体系性）、分布、対立がキーワードであった。

文献言語学は文字学と同様で、常に個別の言語、文字が対象になり文献ごとの特殊性と個性が高い。一般論は成り立たないのである。先生の場合、対象となる言語・文献は、古代チュルク語の一支であるウイグル語で、そのなかでも13～14世紀の仏典を主な研究対象とされた。この時期の読みづらい草書体で書かれた仏典の解読では、文字通り世界で右に出る者がなかった。この種の資料で最も長大なものは、敦煌で発見され現在大英図書館が保管する阿毘達磨俱舍論実義疏の写本で、実に7,000行ほどを擁するが、それを先生は解読された。これと、いくつかの類似の内容を持つ写本の研究を収録した大著『ウイグル文アビダルマ論書の文献学的研究』（京都、2008年）は国の内外できわめて高い評価を受け、平成23年度の日本学士院賞を受賞されたことは記憶に新しい。本書も含めて、先生は実に14冊もの著書を出版されたが、遺作となった最後の2冊は英語で書かれている。昨年12月に何度か病院にお見舞いに行ったが、ベッドの上でその2冊の最後の仕上げをしておられる様子だった。

先生は常に西田先生を目標としておられるように私には思われた。ウイグル語の文献研究を始めたのも、西田先生の助言がきっかけであったという。アンカラに留学しているとき、当時ロンドンで西夏語文献の調査をしておられた西田先生から来た長い手紙に、現代語ばかりせず古代語もしなければならぬと書いてあり、純情な自分はその翌日から古代チュルク語の勉強を始めたとおっしゃっていた。そして生涯をその研究に捧げられた。とりわけウイグル語との関連で漢字音を扱った研究は先生の独壇場であるが、西田先生の影響による所が大きかったと思う。言語学会の会長就任講演ではウイグル語に定着した漢字音（高田時雄氏発見のウイグル字音を先生は独自に *Inherited Uighur Pronunciation of Chinese* と命名された）をテーマとして取り上げ、他の追従を許さない研究の到達点を、いとも容易い事のように解説しておられたのが印象的である。10数個の子音しか区別しないウイグル文字で発音を表記した資料から、もとの漢文仏典を特定する作業は想像を絶する名人技だが、それをやってのけた上で、中国語とウイグル語の言語接触の資料として言語学的な分析を加えられた。

文献言語の中に言語接触の跡を発見する研究としてもう一つ忘れてならないのは、ウイグル語のなかにトカラ語からの借用語があることを明らかにされたことであろう（『アジア・アフリカ言語文化研究』15、1978年）。先生がまだ若い時期で、当時はトカラ語の研究者がほとんどいない時代であったから、今更ながら感服する。ウイグル語仏典に類出する梵語からの借用語に見られるわずかな語尾形式の違いに着目され、それがトカラ語に借用された梵語の形式と体系的に一致することをつきとめられたのであった。それらがウイグル語を介してモンゴル語仏典に借用された

ことも明らかにされたが、この発見の射程は単にウイグル語文献研究にとどまらず、ひろくシルクロードの文化史全体に及ぶ実に画期的なものであった。これは京大の助手時代の業績で、朝早くから言語学研究室の北の隅の席で黙々と研究される姿を学生時代は拝見していた。実に鬼気迫るものがあった。その緊張感の反動であろうか、昼休みに我々と卓球をするのが日課で、負けず嫌いの先生は、ありとあらゆる卑怯で姑息な手段で負けまいとしておられた。なかでも最大の武器は人を笑わせ動揺させる「舌技」であった。

『言語研究』75号(1979)に掲載されたやはり若い頃の論文に、『五体清文鑑』18世紀新ウイグル語の性格について』がある。満洲文字により表記されたウイグル語の研究だが、満洲文字を単純に翻字しただけでは実際の音価は分からない。漢字の発音を表記するのと同じ文字遣いでウイグル語の発音が表記されている事を見抜かれた先生は、現代ウイグル語の200年前の姿をそこに見いだされた。先生流の文献言語学の真骨頂とすべきであろう。数年後には、明朝時代に作成された華夷訳語の高昌館訳語丙種本を扱われ(『神戸外大論叢』33/5, 1982年)、そこに、古代のウイグル語と『五体清文鑑』の言語の中間段階を認める事ができることをあざやかに証明された。この時期に、その後大きく花開く研究の基礎となる手法やスタイルを確立された。

先生は大阪外大時代に、精松源一先生からモンゴル語の手ほどきを受けられた。モンゴル語訳されたパンチャタントラの頭韻詩の研究は、実に学部生時代の業績である。その後の研究にこの古典モンゴル語の素養が大いに役に立った。同級で後の淳子夫人との出会いもあったからであろう、仲人でもあった精松先生とのことを懐かしく語られた。先生がもう一人、師と仰いでいたのは羽田亨(1882～1955)だった。羽田は超一流の東洋史学者でありながら、明治の時代に独学でウイグル語を習得し、当時の欧米の研究者を凌駕した。庄垣内先生はむろん直接教えを受けることはなかったが、初期の研究は羽田亨が京大文学部に残した写真をもとに行われていた。そういう古い写真を探すのが先生は実に上手だった。雑阿含経のウイグル語訳の写真は石炭箱にあったと言っておられたが、真実の程は終に知ることがなかった。先生はウイグル語学者から見た羽田亨の評伝(『古代文化』50/8, 1998年)を書いておられる。淡々とした文章の中に、先駆者としての羽田の苦勞を理解された先生ならではの、深い敬意と思慕のようなものを感じる。若い頃小説を濫読された先生はエッセーの名手でもあった。

京都大学に移られる頃から、旧ソ連に保管されていたウイグル語文献を直接見ることができるようになった。当初は西田先生と共同のプロジェクトで何度かロシアに行かれた。ここでもお二人は研究面では互いに火花を散らしながら、それでいて仲良くサンクトペテルブルグで調査に当たられた。ロシアの未発表のウイグル語資料は実に膨大で、それをもとに先生は文字通り死ぬまで研究成果を量産された。ここでは紙幅の関係でそれらに触れられないのは残念である。なにかの会合で研究発表を聞く機会があったが、そのなかで、自分はこれまで写真をもとに解説してきた

が、最近ロシアにある写本をオリジナルから読むことができるようになった。そうしてみると、まるで大リーグボール養成ギブスを外した星飛雄馬のように（こんな古い比喻を若い会員は理解できるかしら）、難しい文書がすらすら読めるのだと言って、聴衆を大笑いさせておられた。先生はジョークも一流だった。

先生は非常に個性の強い人で、人柄は決して円満ではなかったし、「円満な」人格の人をむしろ憎んでおられた。その一方で困っている人から何かを頼まれると必ず引き受けられた。「断れへんのや」と言っておられた。若い学徒をほめて伸ばすことも上手だった。そのせいもあったからであろう、先生のファン、特に女性のファンは多かった。端で見ていて奥様がやきもきするのではないかと思うほどであった。さあ、今はあの世で独り身になられてどうしておられるだろうか。「庄垣内さん、ウイグル語の資料はこちらで預かっていますから、当面はそちらで我が儘な西田先生のお守りでもして下さい。」

（京都大学文学研究科教授）

庄垣内正弘先生を偲ぶ

藤代 節

ついに庄垣内先生が亡くなってしまった。珍しく体調を崩されている時期が長いように思う間もなく、余命を数えねばならぬ病状を伺ってより2年余り、早晚お別れする時が迫っていることは分かっていたが、やはり諦めのつかぬ気持ちがする。昨年の12月の初め頃、夜間の授業を終え、最後の学生が講義室を出るのを見送ったとたん、携帯電話に先生からコールがあった。先生は前日から大阪の北野病院に入院していらした。落ち着いた声で、「今後、一切の抗がん剤治療は行わないことになった」と手短にご自身の状態をお話しになり、当時、精力的に最終段階の校正作業を進めていらした著書についていくつかの処理を依頼された。奥様のことを気遣われる言葉はあるものの、ご自身のことについてはあまりに淡々としておいでなので思わず、「あのお、先生は大丈夫、なのですか？」と聞くと「君、わたしを誰やと思うてるんや。全くどうもない。大丈夫や」とおっしゃった。

それからの100日を越える末期の闘病の日々、少なくとも他人にお見せになる顔は平常心を保ったお顔だった。著書の校正作業も続行していらしたし、お見舞いに伺った教え子の中には、病気のお見舞いに行ったというより、自分の研究にアドバイスをいただいたりして、むしろ自分が励まされに行ったような気持ちになった者も多い。このご様子は、最期まで変わらなかった。

庄垣内先生は京大言語の先生という印象が強いが、西田龍雄先生の助手をされた6年間と、京都大学に戻られて教授として過ごされた10年間の、その間の16年間

を神戸市外国語大学で、また京大を定年退職されてからの6年間を京都産業大学で過ごされたので、あちこちに先生に教えを受けた者がいる。私は神戸外大の学部の頃に言語学概論の授業を受け、ロシア学科に所属していたので、大学院で先生から直接に論文指導をいただくことはなかったが、言語学演習の授業を受けた。修士課程に入学した当時、研究をしたいという夢を抱き、その実現の仕方を模索して気持ちだけ空回りして右往左往していたところへ、今から思うと少々無理をして言葉をかけて下さっていたと思うが、「君らは、大学院生になったのだから、その分野では、もう専門家や。研究するにはどうしたらいいのか、何をやったらいいのか、悩むでしょ、でも、そのうち、知らんうちに、ポコッと、どっかへはまるもんなんや、そこから出られなくなったりするんやけど、それはそれでもいいんや、広く色々なことをやるというのもいいやろ、けれども、どこかを深く研究すると結局、色々なことが見えてくるので、同じことや。好きなことを好きなように研究をすればいいのや」というようなことをおっしゃった。先生は確かに専門領域のチュルク語の文献言語研究に世界的な功績を残されたが、一方、言語接触や言語形成についても指導して下さった。また、20世紀末に一種、ブームのようになった危機言語研究については、危機言語という名称を言語学会に広めた張本人でもあり、この方面の若手研究者にも常に温かい眼差しを注がれ、言語学者による危機言語調査、研究のあり方について関心を持っていらした。また、アルタイ諸言語全般はもちろん日本語学をはじめ多岐にわたる言語研究について、的を射た、などとは私が言うことではないが、指導された側にストンと腑に落ちるアドバイスを下さったりしていた。

庄垣内先生に導かれてという訳でもないのだが、ソ連邦のアジアの言語に興味を持った私は、言語学を学ぼうと、西田先生のいらした京大言語に行った。博士課程に進学してから何か面白そうな言語はないかと思っていたら、たまたま1985年にソ連で出たドルガン語という言語の単行本を手にした。庄垣内先生に、私はこの言語を言語接触の観点から勉強します、と言ったら、それが良い、それは面白い、と喜んで下さったのが嬉しかった。正直なところ、選んだ時には、ロシア語と少数民族言語の接触研究というようなことしか考えておらず、この言語がチュルク系の言語とツングース系の言語等の接触の影響下に形成された言語であるとはよく知らなかったが、いつの間にか庄垣内先生にいいよご指導いただく分野にはまってしまったことになる。沢山のことを学び、教えていただいた。

庄垣内先生は、とにかく、人気のある先生だった。女性はもちろん、男性にも、変な言い方だが、老若男女にモテた。それなのに、どこまで本気でおっしゃっていたかはわからないが、「庄垣内さんって、実際にお会いしてみれば、まともな方なのですね、とよく言われるんや」と時々おっしゃっていた。「それは、ちょっと、えらい言われようですね、本当ですか？」と伺うと、「本当なんや。理由はわからんけど。あの人はちょっとねえ……と誰かが言えば、理由もなくそのまま変な人として定着するらしい……」と言っておいでだった。いつの世も学問業績が世間的な成功に繋がるものとする研究者もいると思うが、庄垣内先生はそのことをとても

嫌っていらした。望めばいくらでも世間がチヤホヤするだろう沢山の業績をあげておいでだったけれども、そういうお人柄なので、「変な人」だったのかもしれない。そのようなことにエネルギーを向けるお気持ちもなかったであろうが、そんなハメに陥る危険をとにかく避けておいでだった。その一方で、言語学会の役職などは、その意義に鑑みられたのであろうか、選挙などで選ばればお引き受けになり、端から見ていても巧みにリーダーシップを発揮され、実に真面目に業務をこなされていた。国が理科系の学問分野を益々重視する風潮の中で人文系の学問の大切さを訴える機会を逃さず、学術会議会員としても積極的に発言していらしたようだった。他方で、言語学をはじめとする人文系の学問のあり方については時に厳しい目を注がれることもあった。電子ジャーナルや研究成果のオープンアクセスということについて理科系に遅れをとってはいけないということも強調していらした。

庄垣内先生は、他者への配慮のある方だった。大変、マナーの良い方で、皆で何かを食す時には席についている者全員に行き渡るまで、ご自分の分には手をつけようとなさらず、食べ物が不味いというようなことをおっしゃることは皆無であった。闘病中も医師や看護師、病室の清掃などにあたる職員にも丁寧で、いつもはっきりした声で「有り難うございます」とおっしゃっていた。

そして、庄垣内先生がおいでのところでは話題が盛り上がり、楽しかった。庄垣内先生がいらっしゃる場ではいつも中心がそこにできあがっていた。

私は学生として、また、科研費プロジェクトなどを通して、庄垣内先生の比較的近くで勉強してきたが、「それではだめだ、君、勉強しているのか、金曜にこんなところでビールを飲んでいるようじゃあだめだ」などと怒られることが何度もあった。しかし、それ以上によく励まして下さった。研究の進め方に行き詰まった時に先生からちょっと軌道修正のヒントをいただいたり、時にストレートに主題に関わるアドバイスで励ましていただいたりして、元気回復、目を輝かせた経験がある者は私の他にも国内外に沢山いるだろう。

庄垣内先生は、他の研究者と共同で一つの研究を発表することにはあまり積極的ではなかった。ロシア科学アカデミー・東方学研究所（現・東洋文献研究所）所蔵のウイグル語『十業道物語』の研究は、同研究所の Lilia Tugusheva 先生と共著で出されたが、他には若干数あるのみである。あまりグループで取り組む研究スタイルをおとりにならなかったように思う。それでも、科研費のプロジェクトを主宰される折には、積極的に海外の研究者にも声をおかけになり、国内外の参加メンバーが相互に実質的で持続的な研究協力関係を築ける機会を提供して下さった。海外の研究者やその研究機関に対する庄垣内先生の誠実な姿勢にも多くのことを学んだ。

庄垣内先生は西田先生が言語学講座を担当された最初期の頃の助手でおいでだったが、私は西田先生が京大を退官されてから副所長として赴任された文部省学術情報センター（現在は国立情報学研究所）で助手をつとめたので、最後の助手ということになる。それがどうということもないのだが、この二人の先生に接して、学問の師とは、弟子とは、ということについて観察する機会が何度もあった。お二人の

先生方と一緒にサンクトペテルブルグにあるロシア科学アカデミー東方学研究所へ出張することが何回かあった。ソ連邦崩壊直後の研究所は財政的にも困難な時期でもあり、言動に注意をせねばならない場面も多かったが、市中の古書店などでは貴重本を破格の値段で購入できた。二人の先生方は、店舗に入るまではロシア語を話す私の後についておいでになるという感じだったが、一旦、店舗に入ると、互いにそれらしき棚をすぐに見つけられ、早足で進まれ、ザッと全体に目を走らせ、互いにやや離れた棚の端からそれぞれチェックを開始される。どちらかが、これは、という本を棚から取り上げられると、無言でチラリと視線を向け、時には戦利品のように見せ合い、時には視線を避けるように先にレジを通してしまうなど、競争のようだったが、揃って楽しんでおいでだったのだろう。たまに先生方から「これ、買っておいの方がええかもしれんで」とお勧めいただく本は、大抵、私にとって大変貴重な掘り出し物の本であった。本が原因ではなかったが、エルミタージュ美術館前のネバ川にかかる宮殿橋の上で口論されたこともあった。理由の詳細は忘れたが、ちょっとした誤解が重なったためであったように思う。険悪なムードで、この出張は途中棄権したいと私が頭を抱えて過ごした晩の翌朝には、仲良くロシア風お粥を召し上がっていたりして、取り越し苦労だったということも多かった。西田先生には沢山のお弟子さんがおいでだったが、学問についての大切な相談事は、やはり庄垣内先生を一番頼りにしていらしたと思う。「西田はんとは、袂を分かつような大げんかを何度かしてきたけれど、それでもやっぱり、私の先生やからなあ、関係はそう簡単には断てない。学問の師弟とはそんなもんや」と庄垣内先生はよくおっしゃっていた。

庄垣内先生が亡くなってもう四ヶ月になり、季節もすっかり変わってしまった。思い出すことは尽きないが、先生の学問の継承者達が世界中あちこちでご逝去を嘆きつつも次のステップを踏み出している。先生は、今頃、病から解放されて、天界できっと私達を見守って下っていると信じている。

(神戸市看護大学教授)

略年譜

- 昭和 17 年 4 月 17 日 広島県呉市に生まれる
- 昭和 39 年 4 月 大阪外国語大学モンゴル語学科入学
- 昭和 43 年 3 月 大阪外国語大学モンゴル語学科卒業
- 昭和 43 年 4 月 京都大学大学院文学研究科修士課程入学
- 昭和 45 年 3 月 京都大学大学院文学研究科修士課程修了
- 昭和 45 年 4 月 京都大学大学院文学研究科博士課程進学
- 昭和 45 年 10 月 アンカラ大学言語・歴史・地理学部言語学科に留学（昭和 47 年 1 月まで）
- 昭和 49 年 5 月 京都大学大学院文学研究科博士課程中途退学
- 昭和 49 年 6 月 京都大学文学部助手
- 昭和 54 年 12 月 京都大学文学部辞職
- 昭和 55 年 1 月 神戸市外国語大学助教授
- 昭和 59 年 4 月 神戸市外国語大学教授
- 平成 6 年 11 月 京都大学博士（文学）の学位を授与される
- 平成 8 年 4 月 京都大学大学院文学研究科教授
- 平成 9 年 4 月 日本言語学会編集委員長（平成 12 年 3 月まで）
- 平成 15 年 4 月 日本言語学会会長（平成 18 年 3 月まで）
- 平成 16 年 4 月 京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター長を併任（平成 18 年 3 月まで）
- 平成 17 年 10 月 日本学術会議会員（平成 23 年 9 月まで）
- 平成 18 年 4 月 京都大学名誉教授
- 平成 18 年 4 月 京都産業大学客員教授（平成 24 年 3 月まで）
- 平成 19 年 1 月 ベルリン自由大学客員教授（平成 19 年 4 月まで）
- 平成 22 年 10 月 中国中央民族大学招聘教授（平成 22 年 11 月まで）
- 平成 23 年 6 月 『ウイグル文アビダルマ論書の文献学的研究』により日本学士院賞受賞
- 平成 26 年 3 月 23 日 大阪市にて逝去

主要著作目録

【著書】

- 1982 『ウイグル語・ウイグル語文献の研究』I 神戸市外国語大学外国学研究所.
 1985 『ウイグル語・ウイグル語文献の研究』II 神戸市外国語大学外国学研究所.
 1991 『古代ウイグル文阿毘達磨俱舍論実義疏の研究』I 京都：松香堂.
 1993 『古代ウイグル文阿毘達磨俱舍論実義疏の研究』II 京都：松香堂.
 1993 『古代ウイグル文阿毘達磨俱舍論実義疏の研究』III 京都：松香堂.
 1998 『ウイグル文 Daśakarmaphāḍānamālā の研究』(リリヤ・トゥグーシェワ、藤代節と共著) 京都：松香堂.
 2003 『ロシア所蔵ウイグル語文献の研究—ウイグル文字表記漢文とウイグル語仏典テキスト—』京都大学大学院文学研究科.
 2008 『ウイグル文アビダルマ論書の文献学的研究』京都：松香堂.
 印刷中 *The Uighur Abhidharmakośabhāṣa Preserved at the Museum of Ethnography in Stockholm*. Harrassowitz Verlag: Wiesbaden.
 印刷中 *Chinese Text Written in Uighur Script U5335: A Reconstruction of the Inherited Uighur Pronunciation of Chinese*, Berliner Turfantexte XXXVI (coauthored with S. Fujishiro, N. Ohsaki, M. Sugahara, and A. Yakup). Brepols: Turnhout, Belgium.

【論文】

- 1974 「ウイグル語写本・大英博物館蔵 Or.8212 (109) について」『東洋学報』56-1.
 1976 「ウイグル語写本・観音経相應—観音経に関する avadāna-」『東洋学報』58-1/2.
 1978 「古代ウイグル語におけるインド来源借用語彙の導入経路について」『アジア・アフリカ言語文化研究』15 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所).
 1979 「『五体清文鑑』18世紀新ウイグル語の性格について」『言語研究』75.
 1981 Ein uigurisches Fragment eines Beichttextes. *Scholia. Beiträge zur Turkologie und Zentralasienkunde*. Otto Harrassowitz: Wiesbaden.
 1982 「古代トルコ語 n 方言における *i/i* の低母音化について」『神戸外大論叢』33-3.
 1982 「『畏兀兒館訳語』チュルク語の性格について」『神戸外大論叢』33-5.
 1987 「ウイグル文献に導入された漢語に関する研究」『内陸アジア言語の研究』II (神戸市外国語大学外国学研究所).
 1995 「ウイグル文字音写された漢語仏典断片について—ウイグル漢字音の研究—」『言語学研究』14 (京都大学言語学研究室).

- 1998 Three Fragments of Uighur Āgama. *Bahşı Ögdisi, Festschrift für Klaus Röhrborn anlässlich seines 60. Geburtstags*. Simurg: Freiburg/Istanbul.
- 2000 「ロシア所蔵ウイグル語断片の研究 2: 『雑阿含経』『千字文』『阿毘達磨俱舍論実義疏』(中国所蔵)」『京都大学言語学研究』19(京都大学言語学研究室).
- 2002 Fragments of Uighur Daśabala Sūtra. *Splitter aus der Gegend von Turfan, Festschrift für Peter Zieme anlässlich seines 60. Geburtstags*. Şafak Matbaacılık: Istanbul/Berlin.
- 2003 Uighur Influence on Indian Words in Mongolian Buddhist Texts. *Indien und Zentralasien Sprach- und Kulturkontakt, Vorträge des Göttinger Symposiums vom 7. bis 10. Mai 2001*. Harrassowitz: Wiesbaden.
- 2003 「文献言語と言語学—ウイグル語における漢字音の再構と漢文訓読の可能性—」『言語研究』124.
- 2004 How Were Chinese Characters Read in Uighur? *Turfan Revisited—The First Century of Research into the Arts and Cultures of the Silk Road*. Ditrich Reimer Verlag: Berlin.
- 2005 Uighur Movable Wooden Type and its Practicality. *Turks and Non-Turks. Studies on the History of Linguistic and Cultural Contacts*, Studia Turcologica Cracoviensia 10. Jagiellonian University Press: Krakow.
- 2008 Uighur Abhidharmakosabhāṣya-ṭīkā Tattvārthā Preserved in China. *Aspects of Research into Central Asian Buddhism*. Brepols: Turnhout, Belgium.
- 2009 The Fanwangjing 梵網經 (*Brahmajāla-sūtra*)—A Chinese Text Transcribed in the Uighur Script—. 『突厥語文学研究—耿世民教授八十華誕記念文集—』中央民族大学出版社: 北京.
- 2010 A Chinese Āgama Text Written in Uighur Script and the Use of Chinese. *Trans-Turkic Studies, Festschrift in Honour of Marcel Erdal*. Pandora Kitabevi: Istanbul.
- 2012 How Deeply Inherited Uighur Pronunciation of Chinese (IUPC) Rooted in Uighur? —Two Forms of the Chinese Phonological System in Old Uighur—. *Proceedings of the First International Colloquium on Ancient Manuscripts and Literatures of the Minorities in China*. Minzu Publishing House: Beijing.